

# 児童文学批評というたおやかな流れの中で ③

— 〇年代児童文学は守りの人と共に重層化した世界を歩み始め「かはたれ」と出会った。 —

細谷 建治

\* 守り人（重なりあうことばたち）

上橋菜穂子「守り人シリーズ」（偕成社 1996. 7～2007. 3）  
から、ヨゴ語、カンバル語、ロタ語、サンガル語、タルシ  
ユ語、海洋用語、ヤクーのことばなどを除いて書いたら、  
どのくらい短くなるだろうか、と考えたことがある。

例えば、「守り人シリーズ」の第一巻『精霊の守り人』  
（1996. 7）に次のような文章がある。

「ああ、ニュンガ・ロ・チャガ〈精霊の守り人〉よ、あと  
わずかだ。日がしずみ、日がのぼれば、うまれどるときが  
やってくる。」

ナユグのヨナ・ロ・ガイ〈水の民〉は、シウルシウルと、  
チャグムのまわりをうれしそうに泳ぎまわった。ふかい水  
底のあちらこちらから、たくさんのヨナ・ロ・ガイ〈水の  
民〉が集まってきた。彼らがたのしげに水かきのはえた手  
で水面をはたくと、サグの地面をすかして、しぶきがキラ

キラとちった。

「ぶじに、ニュンガ・ロ・イム〈水の守り手〉におなり、  
ニュンガ・ロ・チャガにだかれています卵よ。はやく雲をは  
き、あまい水を、この地と、かの地にふらせておくれ……。」

〈サグ〉というのは、ヤクーたちのことばで、目に見える  
ふつうの世のことで、〈ナユグ〉というのはふだんは目には  
みえない、もうひとつの別の世界のことだ。天国と地獄  
ではなく、同時に同じところにあるから、ときに重なって  
見える。ナユグもサグも最初は説明されたが、『守り人』  
では基本的な世界の構図だから、その後は何の説明もなく  
ふつうにしばしば出てくることばたちだ。

百年に一度、ナユグのニュンガ・ロ・イムが卵をうむ。  
それを好物とするラルンガがねらう。ナユグだけでなくサ  
グにもうむ。うみつけられた人間＝ニュンガ・ロ・チャガ  
〈精霊の守り人〉の卵をやはりラルンガがねらう。